

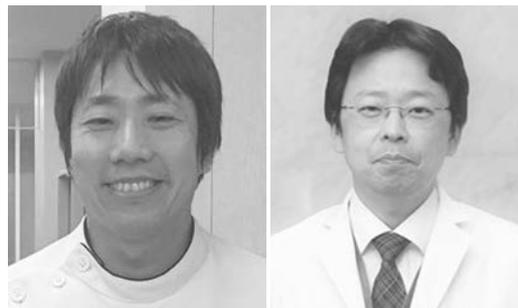
II 特別シリーズII

科学技術
振興機構

『さくらサイエンスプラン』友情と感激

第136回

国際医療研究センターの活動報告



齋藤翔
(国際医療研究センター特任研究員)

大曲貴夫
(国際医療研究センター副院長)

若手研究者8名を招聘、感染症、薬剤耐性、検疫などを研修し交流

●活動報告

2018年1月16日(火)から1月24日(水)までの9日間、さくらサイエンスプランの支援を受け、タイのマヒドン大学、ベトナムのバクマイ病院、フィリピンのフィリピン大学マニラ校、インドネシアのスリアンテイ・サロツソ感染症病院からそれぞれ2名ずつの若手研究者を国立国際医療研究センター



講義中には活発な議論も

に招聘し、研修を行うとともに交流を深めました。タイのマヒドン大学は400床の感染症病床を有し、基礎研究から感染症診療まで幅広い活動を行っている。バクマイ病院は1000床以上を有するベトナム北部の拠点病院であるとともに教育病院としての役割を担い、スリアンテイ・サロツソ感染症病院もインドネシアの感染症専門家育成の中心的施設です。フィリピン大学マニラ校は1500床の総合病院を有し、基礎研究においてフィリピンの中心的な役割を果たしています。

プログラム	
1日目	来日
2日目	オリエンテーション 国立国際医療研究センター見学
3日目	講習、ディベート ワークショップ
4日目	講習、ディベート ワークショップ、発表
5日目	日本科学未来館訪問 国立科学博物館訪問
6日目	講習、ディベート
7日目	第一三共株式会社見学 東京女子医科大学 先端生命医学研究所見学
8日目	成果報告会
9日目	帰国

本研修の前半は新興・再興感染症、薬剤耐性、検疫などの感染症領域について、後半は国際共同治験、プロジェクトマネジメント、モニタリングなど臨床試験に関する講義を行いました。各国の招聘者は感染症領域または臨床試験の専門性を有しているため、各講義中には活発な議論が行われました。また当センターでの講義の合間には、製薬会社(第一三共株式会社)と先端生命医学研究所を訪問し施設見学をしました。創薬のための研究現場では最先端の解説を受け、多くの質問が飛び交いました。先端生命医学研究所においては最先端の再生医療に関する講義を受け、招聘者たちも大変強い興味を示していました。週末には日本科学未来館、国立科学博物館を訪問して日本の科学技術に触れたのちに浅草を訪問して日本の伝統、歴史を体感することができました。少し忙しいスケジュールでしたが、各国の招聘者たち、日本人スタッフの親睦をより深めることができました。

●プログラムの成果

現在、各国で問題になっている感染症のトピックについて国ごとに発表し、今後どのような研究を行う必要があるか話し合いました。研究に対する体制、取り組み方には違いがみられましたが、重複している問題点も数多く



ワークショップでの発表



先端生命医科学研究所を訪問



修了証授与式



各国のディスカッション

最後に、このような機会を与えて頂いた、さくらサイエンスプランや、プログラムに協力いただいた全ての関係者、施設に心より感謝申し上げます。

最後に、このように機会を与えて頂いた、さくらサイエンスプランや、プログラムに協力いただいた全ての関係者、施設に心より感謝申し上げます。

存在していたため、今後の共同研究の必要性を皆で共有しました。特に鳥インフルエンザやMERSなどの新興・再興感染症や薬剤耐性の問題は各国が重要課題として挙げており、今後の診療、研究両面での協力体制の構築が望まれました。また、国によって入院患者における感染性疾患が占める割合や診療システムは異なりましたが、日本と同様にがんなどの非感染性疾患の患者数の増加傾向がみられました。公衆衛生や生活環境の変化によって今後東南アジアの疾病状況が大きく変化し、免疫不全患者の感染症などに対して新たな取り組みが必要になる可能性が示唆されました。がんや免疫抑制剤使用など免疫不全患者の感染症に対して診療経験が豊富な日本としても協力できる面が多々あると感じます。

直接会って議論し、友好を深めることができたため、継続可能なネットワークの構築という面からみても大きな意義を見出すことができました。

●今後の展望

今回来日した若手研究者が所属する施設は感染症領域において各国を代表する組織であり、ベトナムのバクマイ病院やインドネシアのスリアンティ・サロツン感染症病院とはすでに包括的な了解書を締結し、薬剤耐性菌や院内感染症に関する共同研究、院内感染に関する講習会などを実施しています。国際共同研究に際しては、言語や法律、文化、考え方の違いなど多くの障壁が存在します。そのためプロジェクトの成功のためにはお互いの信頼関係が不可欠であり、さくらサイエンスプランが果たした役割は大きいと考えられます。感染症のグローバル化が進み、鳥インフルエンザやMERS、エボラ出血熱の診療、研究両面における協力体制構築の重要性が益々増加してきています。そのため今後も彼らとの間に築いたネットワークを活用しながら各施設との関係性の強化を進めることが当センターの役割であると考えます。